

針葉樹會報

通卷第八十三號



家形より西吾妻へ

クマ

日本山岳會の山日記に吾妻と磐梯の概念圖を入れる事になりそれが動機となつての吾妻行となつた。上野を出る時は餘りの人混みに度膽を抜かれる、増山君の買つて置いて呉れた三等上段の寢台券を今度程有難く思つた事はなかつた。

板谷で下車する時も身動きがならず窓からやつと飛び降りた。天氣は正に清朗遙かに眞白な東大嶺の一角が柵森の左手に望まれる。

新五色の子金屋によつて朝食を攝り家形小屋まで人夫の同行を依頼する。

高倉小屋の手前でゾンメルシーをはいいた。時々雪がなくなつてスキーを肩にする風が強いので吹き飛ばされ相だ。人夫のお蔭で芒漠たる高倉の東斜面でも迷ふ事なく一筋に青木の小屋に著いた。十何年前に一度來た思ひ出の小屋である。

之から二十分許りで吾妻山莊の前方を通り家形の小屋までもここから約二十分。大部早く著いたので附近を短スキーで歩き廻る。家形の肩への斜面がばかに魅惑的であつた。青霞を透して浮ぶ懷しの藏王、鶯が直ぐ傍の柵の樹の間から鳴く、こんな静かな山はホッさに近頃味つた事がない。

小屋と人夫を後にして家形の肩を指したのは翌る日の朝六時、夜トタン板をビユ／＼うならせてゐた強風も今日は忘れた様に納まつて洵に春のスキー行に應しい上々の天氣。

肩へ出るさ五色沼がまだ凍つてゐた。一切經への廣い鞍部には雪がすっかり消えてゐて悠んびりとした草原に變つてゐる。こんな所で幾人かの人が斃れた事などまるで嘘の様な話である。

家形の頂上から森林の中を右に左に滑り降つて兵子の南側を眞直ぐ行き眩しい雪上に暫しの憩ひをとる。

東大嶺までは迎も登り降りがある。東大嶺は地圖よりも餘程茫漠たる感がある。

天氣の變り易い嚴冬期には全く危險地帯と云はなければならぬ。

人形石の東側で二人のスキーヤーが滑降して来るのを見たがヤケノマ、の小屋へ行つてしまつたのか遂に會ふ事は出来なかつた。人形石の廣い頭へ登つて見るさその人達のシュプールは北の方から來てゐるのがわかつた。大平温泉からでも來たものであらう。

天狗岩の所は廣い岩原になつて居り西の端れにお宮とお助け小屋がある。心配してゐた高湯へ降る尾根も簡單にわかつて暢んびりした氣分で滑つて行く。シールにつけたクリスターボックスがスキーの裏に残つてゐて具合が悪い。それでも三十分程で五百米突をオチて若女平につく。此處で増山君の寫眞に關して特筆すべき事件が起つたが之は私のコーヒー代にして置く。

之から高湯までの降りは案外悪い。今にも落ち相な雪庇の上をしのび足で歩いたり、道がわからなくなつて間違々したりしたがどうやら無事に高湯につく事が出來た。

宿の人達の純朴な事、その顔の美しい事など、白布の高湯には是非もう一度行つて見たい。一週間前から通じたさいふハイヤーをかつて米澤へ出る。此の日は丁度上杉神社の祭禮の最後の日とかで賑かであつた。櫻が丁度満開であつた。

九時二十六分の汽車はガラ空きで悠々一人で座席を占め上野まで寢台の積りでねむり續ける事が出來た。

記 録 (同行 増山清太郎君)

四月二十八日

上野發(一〇、〇〇)

四月二十九日(天長節) 晴風強し

板谷(四、五三)―新五色子金屋(六、二五―七、五〇)―青木小屋(一〇、五〇)―一二、〇〇―吾妻山莊の前(〇、二〇)―家形小屋(〇、四〇)

四月三十日(日曜日)

家形小屋(六、〇五)―家形の肩(六、四五―七、〇〇)―烏帽子(八、四〇)―引返し(八、五〇―九、一五)―昭元(一〇、〇〇)―東大嶺(二〇、四五)―一二、二〇)―人形石(〇、四五)―一、〇五)天狗岩お宮(一、三五)―一二、一〇)―若女平(二、四〇)―三、〇〇)―白布高湯中屋(四、一五)―七、一五)―米澤驛(八、〇五)―九、二六)

四月三十一日

上野着(六、一二)

冬山に籠る(二)

N E W

一月一日 岳川は朝焼に輝いて靜かな朝が訪れた。圖らずも御正月を「五千尺」で迎へる事になつた私達は感慨無量で山を仰ぎながらそれでも何さはなしに新しい希望が湧き起つてくるをおぼえた。食膳には御雜煮や生酢が上つてほのかにお正月の氣分がただよふ。皆お目出度うを云ひ交す。やがて又空は曇つて來た。岩小舎に戻る。雪模様ではあつたがすっかり明日の準備をして、大塚と二人で上までラッセルに行つてくる。

一月二日 今迄にもないやうなげしい雪が終日降り續いた。

午後に入りて風が強くなる。

一月三日 まばゆいばかりの快晴になつた。こんな日に動けないのは残念なことだ。奥又白の出合まで遊びに行く。山肌は新雪につやつやとして、雪煙が目にしみるやうな青空に舞上つてゐる。暖かな河原をあちこち歩きながら思ふ存分眺めて岩小舎に歸つた。山田と二人で出合迄ラッセルをしに行つてから早速用意をして日の暮れるのを待つた。

一月四日 眼をさますと未だ皎々き月が懸つてゐた。實に何日振りかの出發であつた。二時五十分岩小舎を出る。休まずにどんなに登り圈谷底からは、この前のやうに行かずに直接に登つていつた。北尾根に向ふ帝大の人達の燈^{アカリ}だけが下の方にポツンと見える。まだ暗い圈谷を幾度かキックターンを繰越して、丁度六時に涸澤槍の末端の大きな岩まで登つてスキーを外した。無暗に鮮かな朝焼の空の下には亂雑な薄墨色の雲海が無氣味にじつとしてゐた。奥穂から北尾根へかけてさつきからいやな雲がからんで離れない。既に天候悪化の徴は見えてゐた。雪面は風でしまつてゐるもののその下はやはりたわいもなくもぐつて次第に傾斜を増すに従つてラッセルは樂ではなかつた。おまけに時々襲つてくる雪煙に、顔も上げられずに、かがみ込むやうに雪面に體をすりつけた。天幕へはこの前と同じ處を登つて八時半に着く事が出来た。天幕は幸ひ無事で支柱の交叉を僅かに雪面に出して埋れてゐた。早速私達は四人がかりで立廻りながら雪をかき除ける。しかしなか／＼骨が折れた。やうやく堀出した私達は、一度も入らなかつたその天幕の内に入つてほつと一息つき、天幕で吸はうと大事に

持つて來たスリーキャツスルを分けて吸つた。風は愈々烈しくなつてばた／＼と天幕を揺り動かした。恐らく唯一度の機會であつたこの前の日に若し上つてゐたとしても、この長い荒れではどうする事も出来ずに終つてゐたに違ひない。そう思つてやがて天幕を疊んで降りなければならぬ事をなぐさめた。それにしても今度の冬山でつく／＼感じた事は如何にも人数の少かつた事であつた。私達はしかしいつまでも天幕の内にかうしてはゐられなかつた。例のまるくしぼつた入口を開いて四人が順々に這出した時にはもうあたりはすつかり吹雪に變つてゐた。使はなかつたザイルや登攀具をしまつて、最後に天幕をたたんだ。すつかり本格的な悪天となつたので北穂の頂上も斷念して十時、何も見えない吹雪の圈谷の中に降り始めた。そしてデボからスキーを持つて池の平の見當に眞直に下つていつた。池の平からのスキーは荷物が重くて全く樂ではなかつた。二時半岩小舎に歸つた。泊るには早いし、ついでの事に徳澤まで下りてしまはうと言ふ事になつて荷物をすつかりまさめてルックにつめ込んだ。入り切れなくて、てんでに上にしぼり付けたりして結局末雄のは十一、二貫僕達のは八貫はたしかに超えてゐた。その間にも風は益々吹募つて河原に出て見る雪は目も開けられないやうに吹狂つてゐた。突風の度に今にもよるめきさうになつて立止まり、難澁して五時徳澤園に入つた。久振りにこたつに入る。

一月五日 雪 暗い内に起きてこの春迄残して置く荷物をすつかり整理してから、人のいゝ西山隱居に別れを告げて、代赭色のなつかしい小舎を後にした。雪はなほも止まずに山はどうござ

鳴る。私達は複雑な思ひをいだいて黙々としてスキーをすべらしていった。(終)

三峯今昔物語

柿 原生

三峯と言つても近頃は三峯口、三峯ハイキング道と、何處が三峯だか譯が判らない。一昔前即ち諺のまゝに十年先には、三峯は三峯神社の鎮座する山の呼稱であつた。そして古きものゝ本にあれば、實は妙法・白岩・雲探の三山を三峯と呼んだと言ふ。思えば三峯の今昔物語も山岳史家の対象ともなる。

が僕は三峯山に就いて中學三年(昭和三年だつた)から知つたに過ぎぬ。それでも十年前だから今昔物語となるのである。その頃奥秩父の門戸三峯登山は秩父鐵道の影森驛^{カゲモリ}下車で始る。秩父大宮の町からは馬車が強石位迄だが直通してた。僕は早朝に影森驛で下車して大輪迄歩き、夕方神社に登り着いて初めて御山の頂に立てた。田部重治さんが秩父に入つた頃下車した波久禮^{ハケレ}の驛と云ふのは影森驛を離れること拾壹驛も先にあるのだから、その健脚驚嘆の外である。

兎も角僕が初めて登つた頃でも登山者は未だ割合に少なかつた參詣人が多く、彼等は大體秩父大宮一泊、翌日神社々坊一泊、三日目下山秩父町泊りとなる。大輪附近に茶屋も少く、登山道には今日の様な花崗石の道標も無かつた。然も今日ともなれば、電車は三峯口驛に延び、其處からバスが出て大輪の登龍橋迄通ずる。朝上野を發てば、二時間も歩いただけで正午頃神社に到着する。夏は登山家(?)と參詣人で三峯登山の態である。奥院への道も改

つたし、雲探へは目を閉ても行ける様だ。偉い變り方だと言ふ外はない。白岩で大洞側を捲いたなんて事は想像することすらカビの生えた話、況や小舎もない時のことに於ておやである。然も本年の秋には三峯登山のケーブルが懸る。清淨瀧の落つる澤を一氣に越えて、神社直下に到るには十分を要さぬと云ふ。秩父大宮の旅館に講中の影を見ることもないのも當り前の話だ。

然し昭和三年の過去は、省て僕には懐しいのである。トルコニ一銚をつけた登山者が、神社々坊に来る様になつたのが此の頃でビツクル御持參の人は目を見張られてゐた。ゴム底足袋の僕は登山靴と云ふ高價らしきものを欲しいと、眺め入つた事を覚えてゐる。この神社々坊から雲探へ栃本へと、山旅が始る。社坊の人々が翌朝出發の前お別れに手を振つて呉れた頃である。此の頃の感じでは、三峯に登ること夫自身が登山の第一頁だつた。影森驛に下車した時から登山と云ふ意識があつた。最近では三峯の天邊に着いてから奥秩父に入つたと思ふ様になつた。三峯に登つてゐる中は、有明から中房へ行く位の感じしかない。十年一昔、全く變つたもんだれと思ふ。「文明開化の展開を論じて、自然的素朴領域の縮小に及ぶ」と云ふ論文が書ける程だ。

ケーブルに附屬して最近ハイキング道が完成した。太陽寺道入口より大輪に至る荒川沿ひの道で、訪問着を着ても歩けそうな道だ。梓山戰場原にカフェーが出来、八丁坂でポロ蓄音器の荒んだ音を遠く耳にする御時勢では、是悉く止むを得ずと爲すべきか。が此の様な變化を外にして變らないものが二三ある。一は三峯神社々坊の食事と、神社から二瀬に降る道だ。食事で思い出すの

は、常に給仕に出る小僧が何の愛嬌もない手振で飯を盛ることだ。茶碗に飯をギョツとつめ込む習慣だが、半分でいゝと云ふのに一杯山盛りにする。汁も不美味そうに膳の上にある。けれど雲採山から此處に着いて、此の精進料理を食ふことは愉快なことだ。それから二瀬に通ふ道——この中腹から中尾や栃本の方が遙かに望まれる。三峯裏道たるこの道は、栃本附近の小荷駄が通る昔ながらの山道と共に、秩父から失くしてはならない道だと思ふ。道標もない道として、私は一里観音から始る十文字道と共に、此の道を限りなく愛するのである。低徊趣味に生きる山男、古いと言ふだけで耐らない愛着をそうした山道に持つてゐる。(一九三八・五・一五)

(編註) 入替前謙坊が送つてくれた原稿の一ツ。

會員通信

○柿原謙一君より(四月二日附 編者宛)

拜啓 愈々櫻も咲きますね。御元氣のことと存じます。歩一の營内で貴兄の軍服姿を見ることの出来なかつたのは淋しかつたですよ。おまけに小谷部、小林君迄も即日歸郷にて、クマ大人の言によれば小生が例外者となつた譯です。去んぬる陸軍始の觀兵式豫行演習のあつた日、代々木の原で可愛らしい(?)森脇初年兵の軍服姿を見ました。上高地でニコ／＼してゐた童顔に近衛の軍帽がさても似合つてゐたので、あの姿は今でも忘れずに居ます。次に小生此度牛込河田町の陸軍經理學校の方へ分遣せられ、昨四月一日入校しました。一生懸命に軍隊經理の學問

を勉強し、自己を肥らせてみたいと思つてゐます。針葉樹會の皆様にも宜敷く。 敬具

○松木謙三主計少尉より(四月十日附 中川君宛)

拜啓 愈々○港より出征、東支那海を難なく通過、今や長江を上へ／＼と進行中です。長い船旅でのんびり處かあき／＼しました。幸半客船なので將校は一等船客扱で洋行でもしてゐる様です。何時迄も乗つてゐたいと皆で申してゐます。話に聞く通り實に河中の廣い濁つた河です。兩岸は一望千里、平原です。岸の楊柳緑に、菜花、桃李花盛です。岸には一町毎に四ツ手網あり。吳淞、江陰、鎮江、南京等の古戰場を遙に眺めつゝあり。行先は支那の中央○です。近代的建物多く内地の港と大した變りはないと思はれます。只水は一切飲めず、マラリヤが流行するそうだから困りものです。針葉樹會員代表の意味でお便りしましたから會の時にでも皆様にお傳へ下さい。 敬具

○堀岡清君より(長崎にて四月二十一日發 編者宛)

(前略) 毎日々々手紙と電信を書いてゐる身には原稿など思ひもありません。尤も筆が立つなら別ですが。只今社用で上海、青島へ行く途中長崎に居ります。一月には天津へ行くし大陸とは益親しくなる譯です。一度上京したいと思つて居りますが、仲々チャンスがありません。二週間程前大阪迄行つたんですが、トウ／＼東京迄は足が伸びませんでした。皆さんに宜敷。

○近藤恒雄君より(五月二日附 編者宛)

謹啓 前略天長節と日曜日を連れて天孫降臨の日向の國高千穂の峯に登つて來ました。霧島林田温泉より四時間半の行程で

す。途中鳥の背越の險で猛烈な風に出會ひひどい目に會ひましたが幸ひ無事頂に立つて皇室の繁榮と國運の隆盛を祈願致しました。それから神武天皇をお祭りしてある狹野神宮に參拜し宮崎から延岡に出て、それから自動車で阿蘇に出て約三日の旅行を終りました。

南九州に又一つ美しい印象を受けました。此の地方一帯の田舎の家の屋根は全部神社の屋根と同じで櫓が乗つて居て流石天孫降臨の地を思はせます。午前九時烈風中に頂に立ちました處峯守石橋老人がさても喜んで歡待してくれました。人生の大半を峯守で通した此老人に何んとも云えない魅力を感じて、彼の希望に依り新しい國旗を一流買つて頂に立て、きました。思へば楽しい山旅でした。諸賢の御健康を祈る。

山岳部報告 (二月、三月、四月)

記 録

(1) 谷川スキー行 (二、四—五) 里見 木島

(2) 赤城スキー行 (二、一一) 高橋

(3) 穂高岳川天幕生活 (三、一一—三、三〇) 船本 大塚 宮城

山田 久保

今度の山行も天候に見放された。雪の多いためバスは奈川渡までしか行かず坂巻泊りとなつた。十五日天幕を張り(五千尺より登り約三十分の地點)機をまつも、朝の中は良くて支度にかゝる雪の降りだす始末に大腐り。十七日全員で善六澤より西穂高にむかふも稜線へ出ると吹雪さなり仕方なく引返す。故に

奥又白は割愛し岳川に精力を集中する事に決した。二十二日夕方ぶりに晴上り三人(十九日船本、宮城下山)で天狗澤より西穂にむかふ(久保は天狗澤の下から歸る)しかし途中より天候悪化し猛吹雪中に登頂して、雪崩の危険多き西穂高澤を漸く下りた。二十八日二人(久保二十四日下山)で明神最南峯と四峯の間から出る澤をつめて明神主峯に登頂し上手宮川を下つた。しかしこの行も後半天氣崩れて奥又白へ下る豫定を中止してしまつた。これで十數日も山に居て僅か二回しか登れなかつたわけに實になんともいへなかつた。

(4) 新入部員歡迎登山 (四、二三) 船本、大塚、日江井、宮城、深谷、山田、小泉、久保、根本、佐藤(以下新入部員) 林(豫三) 後藤竹葉、井出(以上豫一) 鈴木、清水(以上専一)

新入生を迎へて大倉高丸に登つたが天氣悪く折角の眺望も駄目で氣の毒だつた。例の如く田野鑛泉で牛鍋コンバを行ふ。

(5) 富士山 (四、二四—二五) 船本、日江井、久保 歡迎登山より別れて富士へ来る。今年は例年より雪が多く且つ前日の雨が中の茶屋以上は雪で、それが腐つてラッセルには苦勞する。翌日は快晴八合邊は相當な堅雪且つ烈風のため苦勞する。今年ばかり晩くまでゾムメル・シーが楽しめさうである。

(6) 白峰北岳及大井川東俣、西俣へ (四、二四—五、一) 大塚、山田、樫淵、佐藤、根本

廿四日、夜叉神峠をこゆ。廿五日、荒川谷廻行中樫淵頭部に負傷。廿六日、大塚、佐藤は樫淵を伴ひ一旦甲府へ下山。樫淵の傷はあまり重からず、醫者の手當後直ちに歸京せしむ。廿七日

四人腹平に會し、廿八日、池山釣尾根の砂拂下にビバーク。廿九日、北岳登頂。豫科生三人は直ちに下山。大塚一人間の岳を越え東俣へ、廣河原にビバーク。卅日、雪ナゲ澤を登り塩見の肩に出て蝙蝠を越へて西俣に下る。一日轉付峠を越へて歸京。檜淵の傷はその後經過良く最早全快に近し。但し御兩親初め皆様に御心配をかけて誠にすみません。(大塚)

日誌

○定期部員集會 三月四日 於本科

出席者 本科四名、豫科三名。春山參加者確定し、出發日取、準備其他行ふ。

○新入部員歡迎會 四月十五日 於本科部室

出席者 本、豫科全部員。新入部員來會者左の如し。

佐藤眞一(三ノ六)、高野秀男(一ノ四)、後藤隆之(一ノ四)、

竹葉彌一郎、關岡賢治、井田潤一郎

○第二次新入部員歡迎會 四月廿一日 於本科部室

出席者 本、豫科全部員。十五日豫科の會と別に専門部の爲に開催す。來會者左の如し。

山本文夫(專二)、松村博(專二)、鈴木肇(專二)

尙歡迎登山を廿三日、大倉高丸に行ふの件決定す。

○部員集會 四月廿八日 於本科部室

出席者 本科三名

皆山へ行つて居るのでよくは集まらなかつた。

記 錄

○霧ヶ峯(二月十二日) 中川孫一

神経痛全快後最初の山旅である。張り切つては居たが、内心不安はあつた。がスーッと最初の一滑りを快適にやつてのけたときは、スキーを初めて覺えたときのやうに嬉しかつた。

○熊の湯(三月十一・十二日) 中川孫一

霧ヶ峯で自信をつけ、三月十日が會社の創立記念日なのでブリッヂの連休を作つて志賀高原でスキー大會を催した。快晴、雲クラストと毎日條件は變つたけれど、充分スキーを堪能した。覗小屋から湯坂を一氣にとばした直滑降の爽快味は強く印象に残つた。

○足柄峠、金時山(四月九日) 中川孫一

思ひもかけず、三、四寸の春雪が金時の北斜面に残つて居た。すばらしい快晴で新雪に輝く富士の美しさは言語に絶した。總勢十人の中女の子が五人も參加した會社の山岳部の催としてはコースも天氣も氣分も満點だつた。

○日ノ出山(四月廿五日) 中川孫一

御嶽神社に戰勝を祈願し、日之出山から西多摩工場の裏山の勝峯石灰山までのルートを探つてみた。日之出山頂は展望台として至れり盡せりさいふまでに設備され、放射狀の登山道が山麓の各部落に朗々と通じて居るのには驚いた。

○雲取山(四月二十九・三十日) 中川孫一

三峯神社に戰勝を祈願し、白岩小屋に泊つた。残雪は割合少なかつた。秩父にも漸く春は來やうとして居る。曉の小鳥の歌は實に楽しかつた。雲取一等三角點の展望は申分なかつた。降り

そよぐやうな春光を浴びて七ツ石尾根の羽毛のやうなカヤトの中に溶けてゆくやうな快眠を楽しんだ。鷹の巢から小河内のダムへ一直線に下つてゐる樵ノ木尾根を降つて、やがて湖底に沈む奥多摩の「日蔭の部落」に別れを告げてきた。頂の春雪にもまごふばかりに梨の花は麓の村々に咲き亂れて居た。

○大倉高丸(四月二十九日) 望月達夫

初鹿野―大倉澤―大倉高丸―大谷ヶ丸―瀧子山―初狩
新緑の山を一人歩きする。ボンヤリ浮び上る真白い南の大屏風。丁度そこには現役之二隊が同じ様に春の陽光を浴びて一歩々々登高を續けてゐるのだと、非常に懐しみを覺えた。

消 息

五十嵐數馬君 野村證券株式會社本社へ轉任。

松本 謙三君 (通信先) 中支那派遣甘粕部隊本部氣付高谷部隊
宇佐美敏夫君 五月四日川勝正之氏二女恭子嬢と御結婚さる。

(新住所) 京都市左京區下鴨東梅ノ木町十五
高見 要君 北海道拓殖銀行旭川支店へ轉任。

旭川市九條通十一丁目左三號へ轉居。
新羅 二郎君 應召 五月十二日麻布歩兵第三聯隊へ入營。

(通信先) 麻布區新龍土町、清水部隊丸山隊第四班

森脇 芳之君 幹部候補生第一期試験合格の由

定例針葉樹會 四月十七日(月) 於如水會館

出席者(會員) 奥野、吉澤、久保田、増山、小柳、新羅、小谷部、望月、森川、佐々木(部員) 船本、大塚、日江井、宮城、桒淵、山田、佐藤、根本

折よく上京中の奥野重役出席され、例によつて北海道の山さスキーのお話をうかゞふ。現役側からは「針葉樹第十號」編輯のこと等の話が出、又今晚新らしく見えた部員もあつた。病氣靜養(?)の爲暫く姿をかくしてゐたスケさん久々に顔を出す。

尙四月廿九、卅日連休のプラン等が話題に上つた。

新羅二郎君應召歡送會 五月九日(火) 於如水會館

出席者(會員) 村尾、矢作、久保田、増山、丸茂、小柳、林、松浦、新羅、望月、森川、榎本(部員) 岩崎、原、船本、大塚、日江井、宮城

晚餐を共にして新羅二郎君の入隊を祝す。同君萬二ヶ年に亘る本會名幹事としての御努力御奮闘に對し衷心より感謝すると同時に、身體に氣を附けられて立派に御奉公されんことを切に祈ります。

幹事變更

別記の通り新羅君應召により、會計庶務幹事が缺員になりました處、新入會員中には遺憾乍ら種々の事情でお引受なさる方なく致方なく、暫く望月が會報編輯と兼れてやることに相なりましたから、御承知下さい。

會費納入方の御願ひ

本年度の會費御納め下さいますよう、何卒御配慮の程願ひ上げます。(年額在京會員六圓 地方會員三圓)

送金先 東京市杉並區馬橋二ノ二四〇
望月 達夫宛

記

一金六圓也

但昭和十三年度下期

十四年度上期

✓ 金費

右に納入額下度以

昭和十四年六月

中川 稗

